

國學院大學學術情報リポジトリ

台湾南部台南地域の道士が行う關燈について：
プログラム上の位置からの検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學中國學會 公開日: 2025-03-05 キーワード (Ja): 道教儀礼, 灯儀, 建醮, 分灯, 三台星 キーワード (En): 作成者: 富田, 綾美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001400

台湾南部台南地域の道士が行う關燈について

—プログラム上の位置からの検討

富田綾美

はじめに

台湾南部台南地域^①では、天師道に属する道士達によって、現在も盛んに道教儀礼が行われている。彼らの行う儀礼には古い伝統が数多く残るが、その一方で時代の変化や依頼に応じて新たな儀礼やプログラムを作り出すことも行われてきた。

彼らが行う道教儀礼の中で、一つ特色を見いだせるものに灯儀がある。ここでは、灯儀を、儀礼の名称に灯が含まれるもの及び道士が唱える経文中で灯の働きに言及するもの、と広く捉えておきたい。灯儀は幽法（死者救済の儀礼）及び清法（神への感謝や加護を祈る儀礼）のいずれでも行われる。誦経のみの儀礼もあるが、或いは灯を卓上に置き、或いは道士手ずから灯を神前に進めるなど、実際に

灯を用いる儀礼も多い。

古来、灯は道教儀礼中で使用される重要な物品の一つであり、これを祀る灯儀もまた古くからおこなわれてきた^②。唐末五代の道士、杜光庭の『太上黄籙齋儀』(S.1.507) 卷五十六「禮燈」には次のようにある。

凡修齋行道、以燒香然燈、最為急務。香者、傳心達信、上感真靈。燈者、破暗燭幽、下開泉夜。

凡そ修齋し行道するは、燒香然燈を以て、最も急務と為す。香は、心を傳へ信を達し、上に真靈を感じしむ。燈は、暗を破り幽を燭らし、下に泉夜を開く。

このように、灯は香と並んで重視され、暗い冥界を照らし開く働きが期待された。また、灯が照らすものは冥界だ

けではない。続く「明燈頌」には、

：諸天悉輝耀、諸地皆朗明。我身亦光徹、五藏生華榮。：

：諸天悉く輝耀し、諸地皆朗明なり。我が身も亦た光徹し、五藏華榮を生ず。：

とあり、灯が諸天諸地及び我が身を照らす様子が歌われる。この「明燈頌」は、現在の台南地域で使用される科儀書にも見られる。このように、灯は古くから道教儀礼中において重視されており、現在の台南地域でもまた、その伝統を受け継ぎ儀礼が行われている。このことから、台南地域の道教儀礼中の灯を検討することは、道教の伝統中で台南地域の道教が何を受け継ぎどのような特色を持つのか、道教の伝統中で灯にはどのような意味が与えられてきたかという、より大きな問いにも示唆を与えてくれるだろう。

本稿では、このような問題意識の下、まずは灯儀の台南地域における意味付けを明らかにするため、關燈という儀礼を取り上げて検討する。關燈は、台南地域の複数の道士がこれを行うが、この儀礼に言及した研究は筆者管見の限りこれまでにない⁽⁵⁾。そこで、本稿ではまず、プログラム上の

關燈の位置付けという観点から、この儀礼の性格を明らかにしたい。台南地域で行われる道教儀礼は、通常、複数の儀礼を組み合わせて一連のプログラムを作成し、依頼者の希望に対応する。このプログラムには基本形を示すことのできる部分もあるが、実際には依頼内容や時間の都合に合わせて柔軟に行われる。また、地域や道士ごとの習慣の違いも大きく影響してくる。本稿では筆者がこれまでに調査し得た事例に基づき検討を行うが、これが台南地域で行われる道教儀礼全体において、非常に限定された対象であることは初めに断っておきたい⁽⁶⁾。

1、關燈の基本的な内容

本稿では關燈のプログラム上の位置付けを主に検討するが、まずは關燈の内容について簡単に紹介する。

關燈は榜文（依頼者の氏名や道教儀礼を行う目的、一連の儀礼内容等を書いた儀礼文書で、醮壇の外に貼り出される）上において、「關燈し酌獻し三台燈を燃點⁽⁷⁾し「醮主の延生を願い福を請ふ」儀礼であると説明される。道士の説明によれば、「關燈」とはおよそ灯に念じることである。また、「酌獻」とは神へ酒等を献すること、「三台燈」とは三

台星（北斗七星の第一星の南下に位置する六星^⑨）を表す灯である。

続いて、關燈の科儀書の内容を確認したい。筆者はこれまで、關燈の科儀書を二種確認している。一本は内題が『金籙禳災總讚関灯酌献科儀』（以下『總讚関灯』という）、奥書によれば甲寅（一九七四）年七月に白砂崙壇の郭高典道士が抄した手抄本である。筆者は二〇一八年十一月に王鵬榮道士（左鎮。道士の氏名の後に書く地名は、その道士がおよそ属する地域を指す。以下同）所有の影印本を更に複写し製本した科儀書を、氏から提供されている。



【写真1】關燈の科儀書と三台燈
（二〇一九年十一月九日筆者撮影）

もう一本は『金籙三元祝讚神燈科儀』（以下『三元祝燈』という）と内題が付けられており、奥付によれば二〇一八年に新市玄真道壇の鍾東憲道士が修輯した活字本である。筆者は二〇二三年十二月二十四日にこの本の内容を撮影している。

題には「關燈」と見えないが、この科儀書が使用された事例^⑩では、榜文上の關燈の位置でこの儀礼が行われ、鍾東憲道士からもこの儀礼がいわゆる關燈であると説明された。この二本は基本的な構造には共通点も見られるが、詳細を確認するとその内容には明らかに違いがある。まず、どちらも歩虚、淨壇、入意（意文（榜文と概ね同じ内容の文書で儀卓上に置く）の読み上げ）、献茶を行ったのち、主に高功が科儀書の本文を読み上げながら三台燈を三清前に進め、最後に道士全員が松明を持って醮主の平安等を祈念する歌を歌う、という共通の構造を持つ。異なるのは高功が読み上げる本文の内容であり、「皈命」し「信禮」する対象が、『總讚関灯』は「十一大曜星君」「南斗六司延壽星君」「北斗九皇解厄星君」「天曹本命元辰星君」であるのに対し、『三元祝燈』は「上元一品賜福天官 紫微大帝」「中元二品赦罪地官 清虛大帝」「下元三品解厄水官 洞陰大帝」である。

これらの神名からは道藏所収の灯儀との関連が疑われるが、詳細な儀礼内容の検討はまた稿を改めて行いたい。^⑪

2、關燈を含む事例のプログラムについて

台南地域で行われる道教儀礼は、大きく幽法と清法に分けることができ、それぞれはまた正式なプログラムによるもの（齋醮儀礼）とそれ以外に分けられる^⑩。筆者管見の限り、關燈は清法のいくつかのプログラムで行われるが、幽法では行われない。

筆者が実際に關燈を観察した事例は五例、榜文等の儀礼文書のみ記録した事例が他に三例ある。儀礼の規模ごとに、五朝（約五日間）の正式なプログラムによる清法の儀礼（以下「正式な清醮」という）が六例（うち二例は榜文のみ）、三朝（約三日間）の正式なプログラムによらない

儀礼が二例（うち一例は榜文のみ）であった。以下の検討では、このうち五朝の正式な清醮のうち一例と、三朝の正式なプログラムによらない儀礼二例を取り上げてそのプログラムを示す。また、比較のため、榜文上には關燈が書かれたが、道士の都合により実際には行われなかった事例の榜文も取り上げる。

表中、早は昼食前（約十二時）、午は昼食後（約十四時～十八時）、晩は夕食後（約十九時～）である。時間は目安であり、実際は事例ごと、日ごとに異なる。なお、斜体の部分は意文等で補ったため、時間の区分が確かでない。

【事例1】台南市中西區水官大帝廟における金籙謝恩祈安芳醮五旦夕

・二〇一九年十一月二十五日―十二月一日（農曆十月廿九―十一月初六日）。主行科事は吳政憲道士（府城）。

	早	午	晩
水醮 11月25日	起鼓、發表、啓白、玉樞經、北斗經、三官經、午供	天官寶懺、地官寶懺、水官寶懺、三界萬靈聖燈、三獻、打水部、送水王	

火醮 前日 11月26日	起鼓、發表、啓白、玉樞經、北斗經、三官經、午供	天官寶懺、地官寶懺、水官寶懺、三界萬靈聖燈、三獻、打火部、送火王	鬧廳、焚油逐穢
第一日 11月27日	發表（榜文上は玉壇發表だが、実際は通常の發表で行った）、啓白、揚旗、見朝（廣信府（張天師）。以下同）、朝天寶懺卷一・二、午供、見朝	朝天寶懺卷三・六、見朝	鬧廳、分燈
第二日 11月28日	道場進茶、見朝、朝天寶懺卷七・八、午供、見朝	朝天寶懺卷九・十、啓師聖、見朝	宿啓玄壇
第三日 11月29日	見朝、啓師聖、早朝行道、啓師聖、見朝	午朝行道（午供）、見朝、啓師聖	晩朝行道
第四日 11月30日	見朝、啓闕、玉皇經、午供、見朝	補謝、關燈、見朝	（他の醮の普渡）
第五日 12月1日	見朝、重白至尊、進表、午供（觀音獻供）、見朝	玉樞經、北斗經、三官經、三界萬靈聖燈、見朝	正醮

五朝の清醮の儀礼である。筆者はこの事例を水醮から第五日までの七日間調査したが、後日に行われた普渡は観祭できていない。この事例の主行科事の呉政憲道士は、府城で清代から続く伝統道壇の道士である。そのことによつて彼の行う儀礼がすなわち伝統的であると見なせるわけでは

ないが、伝統道壇の道士が正式なプログラムの中で關燈を行つたことは、注意しておいてよいだろう。關燈は第四日の午後に行われた。この日の夜は、道士達が別の現場で儀礼を行う必要があるこのような進行になっているが、他の事例から類推するに、本来であれば晩の時

間帯に關燈が行われるものと思われる。

筆者管見の限り、台南地域で行われる五朝の正式な清醮のプログラムは、当然事例ごとの事情によって細かな差異も生じるが、大きく二つの型に分けられると言える。一つは【事例1】のように玉皇經に関する一連の儀礼を第四日

に行うもの、もう一つは玉皇經を第五日に行い、第四日と第五日の科目のほとんどが入れ替わるものである。後者のプログラムで行われた事例を筆者はこれまで調査し得ていないが、榜文を記録できた事例があるため、次にその内容を示して検討を行いたい。

【事例2】台南市東區太子普安宮における金籙謝恩祈安芳醮一大會行科五旦夕

・二〇二三年十一月十七・二十二日（農曆十月初五・初十日）。主行科事は林基瑞道士（台南市東區）。

	早	午	晚
打火部 前日 11月17日		火部（請神・酌獻）、打火部、送火王	焚油逐穢
第一日 11月18日	起鼓、發表、啓白、揚旗、午供	朝天寶懺一―五	分燈
第二日 11月19日	道場進茶、朝天寶懺六―七、午供	朝天寶懺卷八―十、啓師聖	宿啓玄壇
第三日 11月20日	啓師聖、早朝行道	啓師聖、午朝行道、午供	啓師聖、晚朝行道
第四日 11月21日	重白至尊、進表、宣玉笈之龍章 演琅函之鳳篆、午供（啓闕、進表）	（玉皇經上・中・下卷）	關燈、拜天公 （補謝）

11月22日	第五日 啓闕、玉皇經三卷、午供（重白至 尊、玉樞經、北斗經、三官經、午 供） 補謝 （三界萬靈聖燈、正醮）	正醮、謝壇
11月24日	放水燈	
11月25日		普渡

五朝の正式な清醮の儀礼である。この事例では、發表の途中で醮壇内の調査が許可された等の事情から、送火王、焚油逐穢、起鼓、發表及び後日行われた放水燈を調査できないため、傍文及び聞き取りにより補った。

この事例では、道士の都合により、第四日と第五日について、傍文に書かれた内容と実際に行われた儀礼が異なっている。斜体が傍文に書かれたプログラムであり、そのあとに括弧書きで示したのが実際に行われたものである。実際に行われたプログラムは【事例1】と概ね同じ内容であるが、時間の都合から第四日の午供と關燈が省略された。ここでは、【事例1】との比較のため、傍文に書かれたプログラムについて検討する。

傍文によれば、關燈は第四日晚に行われる予定であった。注目されるのは、第四日晚の關燈と、第五日午後の三

界萬靈聖燈、晩の正醮、謝壇の位置が【事例1】と変わらないことである。このうち、正醮、特に収真文と謝壇は、道壇の解体に関わる儀礼であるため、必ずプログラムの最後に置く必要があるものと考えられる。

關燈と三界萬靈聖燈は、名称からも明らかにおりに共に灯儀である。但し、關燈は道士が灯を實際に灯を三清の前に進める、松明を持ちながら壇を巡る等の要素を持つ比較的複雑な儀礼であるのに対し、三界萬靈聖燈は道士一人で行うことが多い誦經の科目と言え、所要時間等が大きく異なる。そのため、晩に正醮が控える第五日に關燈を行うことは避けられたものと考えられる。いずれにせよ、【事例1】との比較により、關燈と三界萬靈聖燈は、前後の他の儀礼との関係性、連続性によってプログラム中に置かれる儀礼ではないと分かる。つまり、關燈は必ずしも玉皇經の

後に行う必要はなく、三界萬靈聖燈も三元寶懺の後、正醮の前に固定されるものではない（正醮の前に行わない例は後述の【参考1】【参考2】に見える）。むしろ、關燈が第四日晚に、三界萬靈聖燈が第五日の午後の最後に置かれることから、各日の晩の時間帯に何らかの灯儀を行おうとする意図を汲み取ることが可能なのではなからうか。その

ように毎日特定の時間帯に行う儀礼の例には、昼前の午供と晩の最初の開廳（奏楽）が挙げられる。これらは同じ儀礼を日毎に多少内容や調子を変えて行いが、同様に「灯儀」のバリエーションの一つとして、關燈と三界萬靈聖燈が行われている可能性をここで指摘しておきたい。
次に、正式なプログラムによらない三朝の事例を示す。

【事例3】台南市南化區龍虎寺における靈寶祝壽祈安清醮三旦夕

・二〇二〇年二月六―八日（農曆正月十三―十五日）。主行科事は王灯榜道士（左鎮）。

	早	午	晚
前日 2月5日			開廳、焚油逐穢
第一日 2月6日	起鼓、發表、啓白、朝天寶懺卷一、午供	朝天寶懺卷二―六	開廳、分燈
第二日 2月7日	道場進茶、朝天寶懺卷七―八、午供	朝天寶懺卷九―十、玉樞經、三官經	開廳、 關燈
第三日 2月8日	重白至尊、三元寶懺、三獻（謝恩賽愿三獻儀）、午供	三界萬靈聖燈、謝壇、普渡	

祝壽醮、すなわち神明の生誕日を祝う名目で行われた儀礼である。儀礼の名称には清醮とあるが、第二日の宿啓と第三日の正醮が行われないこと等から、正式な清醮とはみなせない。關燈は、第二日の晩に行われた。三朝の正式な清醮であれば、この位置には宿啓が行われる。台南地域で行われる宿啓の意義については今後改めて検討する必要があるが、翌日以降に行う儀礼のための準備の科目であるこ

とは確かである。道士からは、この事例では、宿啓を必要とする科目が第三日には行われないため、空いた第二日晩に適当な科目として關燈を行ったと説明された。關燈を選択した理由は道士に確認できていないが、第一日の晩に分燈、第二日の晩に關燈と、晩の時間帯に必ず灯儀が行われたことは注意してよいだろう。

【事例4】台北市内湖區内湖碧霞宮における靈寶羽化登真歸位芳醮一大會行科三旦夕（二〇一八年十月四―六日（農曆八月廿五―廿七日）。主行科事は吳政憲道士（府城）。

	早	午	晚
第一日 10月4日	起鼓、發表、啓白、朝天寶懺、午供		關燈
第二日 10月5日	道場進茶、午供	進表、太上黃庭外景經	
第三日 10月6日	重白至尊、正醮	普渡、謝壇	

榜文のみ道士から提供された事例である。廟の宮主（廟の主人で、宗教的指導者でもあった）の喪葬儀礼を終えた

後に行われた。この事例以外で「靈寶羽化登真歸位芳醮」もしくはこれに類する名称が付けられた事例は確認できていない。台北の廟であるが、この事例に先立つ宮主の喪葬儀礼も、呉政憲道士に依頼して行われた。筆者はそのうち五旬の一天（約一日）の儀礼のみ観察した。

關燈は第一日の晩に行われている。他の事例では、必ず分燈を行う位置であるが、この事例で關燈を行った理由は確認が取れていない。しかし、分燈も名称から明らかとなり灯儀であり、通常その分燈を行う位置で關燈が行われ

たことは注目に値する。

ここまで筆者が調査し得た事例を示してきた。このうち【事例1】と【事例2】で示したとおり、五朝の正式な清醮でも關燈は行われ、むしろ筆者が調査し得たこの規模の事例では全て、少なくとも榜文等の作成時点では關燈が予定された。しかし、はじめに言及したとおり、管見の限り先学による事例報告及び例示されるプログラムには、關燈を行うものが一例もない。その場合のプログラムは次のとおりである。

【参考1】臺南地區五朝祈安醮典常見科儀安排⁽¹⁵⁾

	早	午	晚
第一日	起醮鼓、玉壇發表、啓請聖真、揚旗掛燈、逢午獻供	朝天大懺	皇壇奏樂、分燈
第二日	道場進茶、朝天大懺、逢午獻供	朝天大懺、宿啓啓師啓聖	皇壇奏樂、勅水禁壇、謝師謝聖
第三日	早朝	午朝、午朝獻供	皇壇奏樂、晚朝
第四日	玉皇經啓闕、玉皇經、逢午獻供	觀音山開光、玉皇經、施放水燈、引孤安座	皇壇奏樂、三界萬靈聖燈
第五日	重白至尊、登壇進表、逢午獻供	玉樞寶經、北斗真經、三官妙經、通誠正醮	謝壇、普渡

【参考2】五朝の基本形⁽¹⁶⁾

	早	午	晩
第一日	起鼓、発表、啓白、揚旗、朝天宝 懺Ⅰ、午供	朝天宝懺Ⅱ	奏楽、分燈捲簾
第二日	奏楽、道場進茶、朝天宝懺Ⅲ、午 供	朝天宝懺Ⅳ	奏楽、宿啓
第三日	奏楽、早朝行道	午朝行道	奏楽、晩朝行道
第四日	奏楽、重白、進表、午供	玉枢経、北斗経、三官経、放水燈	奏楽、天官宝懺、地官宝懺、水官 宝懺、五斗経、三界万霊聖灯
第五日	奏楽、啓闕、玉皇経Ⅰ、午供	玉皇経Ⅱ、交経補謝、正醮	謝壇、普渡

【参考1】が玉皇経を第四日に行うもの、【参考2】が第五日に行うものである。注目したいのは、どちらも關燈が行われず、第四日晚には三界萬靈聖燈が行われていることである。また、どちらも第四日に放水燈が置かれている。放水燈は基本的に普渡の前日に行うため、地域の習慣等により決められた普渡の日付に応じて行われることになる。そして第四日に放水燈を行う場合、その日の晩に關燈を行う時間がなくなることは、十分考えられることである。いづれにせよ、ここまでで示した事例では關燈が行われてい

た位置に三界萬靈聖燈が置かれることから、両者にある程度の代替関係が指摘できるだろう。

3 清法で行われる灯儀

以上の事例を確認する中で、共に灯儀である分燈、三界萬靈聖燈と關燈が代替関係を持ちうることが指摘できた。ここで改めて、台南地域において清法の儀礼で行われる灯儀の一覧を示したい。但し、正式なプログラムによらない儀礼では道士が道蔵等から新たに儀礼を持ち込み行うこと

もしばしば見られ、全容の把握が困難であるため、まずは正式な清醮で行われ得るもののみを対象とする。

- ・ 午供…中午獻供す（中午獻供） 神々に供物（香・花・灯・菓・茶・酒・食・水・宝）を献ずる
- ・ 分燈…燈を分かつ（分燈） 新火で灯を点し、その灯を分け道壇内を照らす
- ・ 關燈…燈に關し酌獻し三台燈を燃點し、醮主の延生を願ひ福を請ふ（關燈酌獻燃點三台燈、願醮主延生請福）
- ・ 三界萬靈聖燈…三界萬靈延壽聖燈に關祝す（關祝三界萬靈延壽聖燈） 斗燈に対する灯儀、醮主たちの本命元辰を光彩させる
- ・ 放水（山）燈…水燈を燃し放つ（燃放水燈） 普渡に先立ち、孤魂を招くための灯を用意する
- ・ 普渡…座に登り法を説き、普く由子に施す（登座説法、普施由子） 孤魂に対して説法し施しをする
- ・ 告符五土神燈…燈を燃し卦を畫き、土府に奠安し、柳を挿し祥を招き、符命を安鎮す（燃燈畫卦、奠安土府、插柳招祥、安鎮符命） 廟等を新築、改修した際に行う儀礼の一つ。土府の神々を祭り、五方を鎮める

符命を宣読し、柳枝符をその廟等に安置する
 ・ 五雷神燈…五雷神燈に關し和瘟淨醮を設く（関五雷神燈設和瘟淨醮送） 王醮（王爺を祭る醮）で行われ
 る瘟部の神々に対する灯儀

他にも、灯を使用する儀礼や火に関わる儀礼等、灯儀の周辺にあると見なせる儀礼は存在するが、本稿における灯儀には該当しないためここでは取り扱わない¹⁷⁾。各儀礼の説明は、榜文等の内容を参考に示し、筆者による簡単な説明も添えた¹⁸⁾。

右に示したうち、午供と普渡では、奉献する供物の中に灯が含まれ、その際に灯の働き等が述べられる。このことから、筆者がはじめに示した灯儀には該当するが、灯が中心となる儀礼ではない。また、放水（山）燈は普渡の準備の科目である。告符五土神燈と五雷神燈は、それぞれ慶成醮（廟の新築改修等に合わせた醮）と王醮（瘟神である王爺を祀る醮）でのみ行われる儀礼であり、説明に見えるとおりそれぞれその儀礼趣旨を強く反映している。

これらを除外すれば、灯が儀礼の中心に置かれ、かつ正式な清醮全般で行われ得る灯儀は分燈、關燈、三界萬靈聖燈の三つということになる。すなわち、筆者がプログラム

上で代替し得ることを指摘した儀礼である。しかし、上述の説明からも明らかかとおり、この三つの儀礼は異なる内容を持つ。關燈と三界萬靈聖燈は、灯に「關（祝）」するという表現が儀礼名称或いは榜文上の説明で共通し、また榜文上で「三界萬靈延壽聖燈」と書かれ得ること、「醮主たちの本命元辰を光彩させる」といった説明にいくらかの共通点を見出すことができる。しかし、詳細な検討は今後の課題であるが、進燈等の要素の有無は、儀礼を行う上で大きな差である。また、「關」する対象の灯が異なることも、重視すべきであろう。¹⁹⁾

小結

關燈に言及する先行研究が筆者管見の限り存在しないことは先述のとおりであるが、三界萬靈聖燈についても、大淵氏によって科儀書本文と簡単な解説が示される他は、その内容に論究する研究はこれまで見られないようである。その一方で、分燈はこれまで複数の研究者によって、その内容及び趣旨、道蔵所収の文献との関連性等が論じられてきた。²⁰⁾ それら先学の成果は筆者も大いに頼りにするところであるが、分燈研究の一つの傾向として、行道との関係性

が重視されてきた面があることは指摘できるだろう。これが顕著なものには、ジョン・ラガウエイ氏の成果があげられる。氏は、儀礼のいくつかは道場儀式（行道）の模倣として理解できるとし、分燈もその一例として、道場儀式の準備の儀礼であり道場儀礼の鏡像であるとす。²¹⁾ 氏の指摘するとおり、少なくとも正式な清醮等の比較的大規模な事例においては、行道が道教儀礼の中心であり、分燈がその礼であることは確かである。

一方で、分燈の科儀書の一本に、末尾に「延生請福、願醮主保平安」として道士が松明を持ち一人ずつ歌う部分が含まれるものがある。分燈の科儀書でこの部分を持つ本



【写真2】分燈の科儀書
(二〇一九年二月十九日筆者撮影)

は筆者が知る限り二本だけだが、これは關燈の科儀書に通常見られるものである。また、榜文上で關燈が「願醮主延生請福」と説明され、三界萬靈聖燈が「三界萬靈延壽聖燈」と書かれ得ることからも、「延生請福、願醮主保平安」は、もともとはこの二つの儀礼が持つ働きと考えられる。分燈の本来の意義が行道の準備であれば、「延生請福、願醮主保平安」は新たに分燈に与えられた働きである。現在台南地域で行われる分燈を検討する際には、この要素も考慮する必要がある。

冒頭に示したとおり、本稿では關燈を手掛かりにした灯儀の検討により、台南地域の道教の特徴及び広く道教の伝統における灯儀の意味という大きな問題へ迫ることを指針の一つとして掲げた。本稿ではまず、台南地域で行われる灯儀の相互の関係について、多少の見解を示すことができたと思う。今後は、これら灯儀の科儀書本文の比較及び、分燈や三界萬靈聖燈が行われるプログラムについてさらなる検討を行いたい。關燈に比べ分燈や三界萬靈聖燈は比較的規模の小さなプログラムでも行われ得る。事例の比較検討により、これらの灯儀が道教儀礼上どのような働きを与えられ得るのか検討したい。また、こうした灯儀の研究の先に、道教の伝統中での台南道教の特色を探ることも

今後取り組んでいきたい。

なお、筆者の台南における調査では、台南地域の道士の方達及び楽師の方達、また儀礼を依頼した各廟の方々等に大変お世話になった。心よりお礼申し上げます。

注

- (1) 本稿では、およそ台南市曾文溪以南から高雄市路竹以北の地域を台南地域と称す。また、地名、人名及び現地で使用される用語（儀礼の名称等）等は、現地の表記に近いものとして、正字体を基本的に用いる。なお、「燈」と「灯」は、現地ではどちらも使用されるが、本稿では区別のため、現地の用語は「燈」、それ以外は「灯」と表記する。
- (2) 大淵忍爾氏は『中國人の宗教儀禮』の中で台南市府城陳家の科儀書を収録し、道藏所収の文献との関連等を指摘する（『中國人の宗教儀禮 佛教・道教・民間信仰』福武書店、一九八三年（道教部分の再版『中國人の宗教儀禮 道教篇』風響社、二〇〇五年）。丸山宏『道教儀禮文書の歴史的研究』汲古書院、二〇〇四年等も参照。

- (3) 灯儀については、陳耀庭「照徹幽暗 破狱度人——论灯仪的形成及其社会思想内容」〔陳耀庭道教研究文集 下〕上海書店出版

社、二〇一五年、八〇―八一頁（初出『道家文化研究』第五輯、上海古籍出版社一九九四年）、王進「論燈儀」（『上海道教文化探索』上海市道教協會、二〇〇一年）、張澤洪「道教神仙信仰與祭祀儀式」天津出版、二〇〇三年、二七八―三二〇頁等を参照。

(4) 三界萬靈聖燈と關燈の歩虚及び分燈等に見える。科儀書とは、儀礼の科目を題名とし、その科目をしている間、道壇の卓上においてその本文を読みながら儀礼を進行させるものである（前掲丸山二〇〇四年、一〇頁）。

(5) 前掲大淵一九八三（二〇〇五）年は、台南地域の道士が用いる主要な科儀書を載せるが、この中に關燈は含まれない。また、台南地域で行われた道教儀礼の事例報告は、浅野春二氏等によって数多く行われる（浅野春二「台湾における道教儀礼の研究」笠間書院、二〇〇五年等）が、管見の限りそれらのプログラム中にも關燈は見えない。これは、地域や時代の違い、もしくは調査対象とした道士毎の習慣の違いによるものと考えられるが、このことについては今後も聞き取り等により調査を進めたい。

(6) 本稿の内容は、二〇二三年七月二十九日に國學院大學で開催された第9回東アジア文化研究国際シンポジウムにおいて「台湾南部台南地域で行われる關燈科儀の初歩的研究」という題目で発表した内容を元に、加筆修正したものである。また、關燈については、二〇二三年七月八日に儀礼文化学会で行われた第一回儀礼文

化研究会においても「台湾南部台南地域で行われる關燈科儀の初歩的考察」という題目で発表を行っている。

(7) 「關燈酌獻燃點三台燈」（後述の【事例4】の榜文による）、「願醮主延生請福」（二〇一九年十一月六―十日（農曆十月十四日）に行われた中華道教關聖帝君弘道協會兩岸三地七朝禳災祈安大醮五旦夕の意文による。主行科事（その儀礼を主宰する道士）は鍾昂翰道士（善化））

(8) 「關（祝）〇〇燈」という表現は、台南地域で行われる他の道教儀礼及び道藏中『靈寶領教濟度金書』（S.N.486）卷一二七「關祝神燈儀」等）にもいくつか見える。この用法における「關」の字義を鍾昂翰道士は、「關祝」の「關」は「觀想」の「觀」と同義であり、「關」で心の中で思い、「祝」で口にするのだ」（二〇二〇年二月一〇日聞き取り）と説明する。ひとまずは灯に対して祈願することの表現と考えておきたい。

(9) 野口鐵郎・坂出祥伸・福井文雅・山田利明編『道教事典』、平河出版社、一九九四年、二一四頁参照。

(10) 二〇二三年十一月に台南市新化區清水寺で行われた金籙禳災慶成祈安芳醮五旦夕、主行科事は鍾昂翰道士。關燈は、第四日目の十一月二十四日に行われた。この時は主行科事以外の道士が高功（道士の中心に立ち主に儀礼を行う役職）を務めており、「三元祝燈」はこの道士が持ち込んだ科儀書である。

(11) 筆者が現時点で確認できている限りで関連が疑われる經典には、『上清十一大曜燈儀』(S.N.198)、『南斗延壽燈儀』(S.N.199)、『北斗七星燈儀』(S.N.200)、『北斗本命延壽燈儀』(S.N.201) などで四燈儀、『三官燈儀』(S.N.202) 五燈儀、『靈寶領教清度金書』(S.N.466) 『北斗燈儀』(卷一三六) 『南斗燈儀』 『十一曜燈儀』(卷一三七) がある。

(12) 前掲浅野二〇〇五年、一一二―一三三頁参照。浅野氏は齋醮儀礼とそれ以外とに大きく分けられた後、そのうち齋醮儀礼を醮(清法)と齋(幽法)に分けられる。本発表では、後述のとおり關燈が清法の齋醮儀礼と非齋醮儀礼で行われるため、清法と幽法の區別を先にした。

(13) 洪瑩發・林長正『臺南傳統道壇研究』台南市政府文化局、二〇一三年、一七三―一七六頁参照。

(14) 儀礼文書に記載される主行科事は王灯榜道士であったが、依頼者との連絡調整や儀礼文書の作成を行ったのは王鵬榮道士(王灯榜道士の長男)であった。

(15) 前掲洪・林二〇一三、九〇頁。

(16) 前掲浅野二〇〇五年、二六七―二六八頁。浅野氏は儀礼を行う時間を示していないため、筆者が仮に割り振った。

(17) 例えば、火醮で行われる一連の儀礼は火部の神々を祀る儀礼であるが、科儀書中では特に灯に対する言及は見えない(前掲大淵一

九八三(二〇〇五)年、二三四―二四一頁参照)。また、揚旗が行われる旗竿を燈篙と言うが、これも儀礼中に灯への言及はない(前掲大淵一九八三(二〇〇五)年、二六一―二六三頁参照)。他に、經文中に「香花灯供養」等とだけ見える儀礼もあるが(早朝科儀等)、これもここでは含めない。

(18) 「關燈」、「五雷神燈」以外の説明は、注7の中華道教關聖帝君弘道協會兩岸三地七朝禳災祈安大醮五旦夕の意文による。「關燈」の説明は【事例4】、「五雷神燈」は二〇一九年十一月十八―二十日(農曆十月二十二―二十四日)台南市中西區善德堂における金籙禳災祈安芳醮三旦夕(主行科事は林坤寶道士(府城、人和街道壇))による。筆者の説明は、前掲大淵一九八三(二〇〇五)年及び前掲浅野二〇〇五年を参考にした。

(19) 但し、三界萬靈聖燈の「醮主たちの本命元辰を光彩させる」という説明に見える「本命元辰」は、「總讚関灯」においても「皈命」「信禮」の対象である。また、「三元關燈」は三元の天地水官に対する儀礼であるため、三界萬靈聖燈と重なる部分も多い。これら科儀書の内容検討は、稿を改めて行いたい。

(20) 主要なものとして、Kristofer Sluiper, *Le Feng-teng Ritual taouiste*, Publications de l'Ecole Française d'Etudes Orientales 103, 1975; 呂鍾寬『台灣的道教儀式與音樂』學藝出版社、一九九四年、七五―七七頁等。

(21) 勞格文著、蔡林波譯『中國社會和歷史中的道教儀式』齊魯書社、

二〇一七年、一三〇―一三五頁。

(22) 一本は二〇一九年二月十九日に記録した頼明賜道長（府城）所持

本。表紙題は『分燈科』で、末尾には「明賜道壇 民國戊子年」

とある。戊子年は、二〇〇八年のことであろう。もう一本は、二

〇二三年十一月十八日に記録した林基瑞道長（後甲）所持本。表

紙題は『金籙分燈科』で、末尾に「曾泛舟校正」とある。「曾泛

舟」は府城曾家の曾椿壽道士（一九一三生、一九九二没）のこと

である。

〔キーワード〕 道教儀礼、灯儀、建醮、分灯、三台星